

『西方の人』考察(上)

河 泰 厚

昭和二年(一九二七)七月二十四日の未明、『続西方の人』を書き終えた芥川は、田端の澄江堂でペロナルとジャールの致死量を仰ぎ、みずからの生命を絶った。この時、数え年三十六歳、満三十五歳と五カ月ほどである。

遺書は妻文、友人菊地寛、小穴隆一をはじめ、近親知己に宛てた数通のほか、『或旧友へ送る手記』とした一通があった。これらとともに、彼の枕元には聖書があった。このことは芥川の遺書に等しい正統『西方の人』と関連付けて考える時、様々なことを示唆する。はたして聖書は彼の自殺を止めることができなかつたのであろうか。そうして、正統『西方の人』は彼の聖書およびキリスト教とどのような関係にある作品であるかが当然問われるはずである。さて、昭和二年(一九二七)七月十日の日付のある『西方の人』、および同二十三日の日付で文学的遺書ともなった『続西方の人』は、芥川が心身ともに困憊のさなか、書かざるを得ない衝動に駆られて立ち向かつた、彼の最後の心血を注いだ作品と言える。

〈西方の人〉、すなわちイエス・キリストを指すが、歴史上の人

物の中でこのナザレのイエス・キリストほど長い間、様々な論じられた存在はほかにない。イエスの生涯をめぐる論説は数え切れぬほど多い。芥川の場合も例外ではなく、生涯の最後にこのイエスという存在と直面することとなる。

芥川は彼の〈キリスト伝〉とも言える『西方の人』を書いた目的を作品冒頭で明確に語っている。

日本に生まれた「わたしのキリスト」は必しもガリラヤの湖を眺めてゐない。赤あかと実のつた柿の木の下に長崎の入江も見えてゐるのである。従つてわたしは歴史的事実や地理的事実を顧みないであらう。(それは少くともリアナリスティックには困難を避ける為ではない。若し真面目に構へようとすれば、五六冊のキリスト伝は容易にこの役をはたしてしてくれるのである。)それからキリストの一言一行を忠実に挙げてゐる余裕もない。わたしは唯わたしの感じた通りに「わたしのキリスト」を記すのである。(1この人を見よ)(傍線筆者)

芥川が正統『西方の人』の執筆に当たつて参考にした主な資料は、『新約聖書』の福音書を基本にしたことは言うまでもなく、エルネ

スト・ルナンの『イエス伝』、オスカ・ワイルドの『獄中記』、それにジヨバンニ・パビニの『基督の生涯』の三書であり、その他にニーチェ、ルソー、ダンテ、ゲーテ、フローベルなどの参照のあとも見られる。しかし、これらの影響はあるものの、芥川の描いた『西方の人』はイエス・キリストをめぐる諸説の流れとは無縁の、「わたしの感じた通りに『わたしのキリスト』」を描き出した、芥川独自のキリスト観と言える。たとえば、「赤あかと実のつた柿の木の下に長崎の入江も見えてゐる」「わたしのキリスト」という表現の裡には、いわゆる西欧で盛んなキリスト論の論争なども無縁な場所、文字どおり「わたしのキリスト」を心ゆくままに、静かに描きとってみようとする姿勢が読み取れる。

さらにまた、芥川はその意図のみではなく、書かずにいられない必然的な理由、内的な衝動ともいえるものについても語っている。

誰もわたしの書いたものなどに、——殊にキリストを書いたものなどに興味を感じるものはないであらう。しかしわたしは四福音書の中にまざまざとわたしに呼びかけてゐるキリストの姿を感じてゐる。わたしのキリストを書き加へるのもわたし自身にはやめることは出来ない。(統再びこの人を見よ) (傍線筆者)

と、「まざまざとわたしに呼びかけてゐるキリスト」への熱い共感を隠さない。それはまた、「呼びかけてゐるキリスト」に彼自身が応えることであり、言わば、キリストという「鏡」の前に己れ自身を託し出すことともなる。

『西方の人』は三十七の短章、『続西方の人』は二十二の短章か

ら成り、通観するならば、全五十九章の構成になっているが、多くの〈イエス・キリスト論〉に比べれば、その分量は必ずしも多くはない。ただ、短編作家らしい彼の凝縮された、歯切れのいい文体や彼独自の警句の妙は随所に發揮されている。

正編ではキリストを、その事跡、すなわち、誕生、荒れ野の誘惑、奇跡、エルサレム入城、十字架、復活と、イエスの生涯の順にしたがって描いているが、統篇は芥川自身にとつての重要課題という視点から、その全体像を語っている章が多い。この両作品の質的差異について鈴木秀子氏は、『続西方の人』は、短い、題名からしても、『西方の人』と一連の作として考えられがちであった。しかし、私は、この二作品はまったく性格を異にすると考える。」と、両作品の独立性を強調しているが、しかし、この両作品は密接に結び付き、正統呼応していると言つてよい。但し、統篇が内容に一層の深まりを生み、より切実な響きを持つているのは確かである。それは『雑誌の締め切日の迫つた為にペンを抛たなければならなかつた』(統一再びこの人を見よ) 時間的な制約に追われつつ、書いた『西方の人』と、『多少の閑』(同)を得て、時間的束縛から解放され、自由に自分の心境を吐露した『続西方の人』との違いにすぎない。

正統『西方の人』の両作品が密接に結びついていることは言うまでもないが、両作品を通じての主題もまた明らかである。『西方の人』では、「キリストは今日のわたしには行路の人のやうに見ることが出来ない」、「わたしは唯わたしの感じた通りに『わたしのキリスト』を記す」と、作者は執筆の心境を語っている。その告白は『続西方の人』に至つてはより深い実存的な問題に化し、前述の冒頭の一節

や末尾の「貧しい人たちに」での、「我々はエママの旅びとたちのやうに我々の心を燃え上らせるクリストを求めずにはゐられないのであらう」という一節にも、その思いの深さは読み取れる。このように、正統『西方の人』を通じて一貫している主題とは、芥川の「わたし」のクリスト（傍線筆者）を描くことであり、また、「わたし」呼びかけてゐるクリスト（傍線筆者）に応答することである。それゆえ、この両作品の主な素材は『新約聖書』の福音書から得てはいるが、『新約聖書』に描かれたクリストの一生とはかなりの差がある。笹淵友一氏がそれを「聖書離れ」であると指摘したのもまた当然である。

正統『西方の人』がクリストの一生を忠実に描こうとしたものならば、それと聖書に描かれたクリストの一生と対照することで、正統『西方の人』の「聖書離れ」の程度も判断できる。しかし、これがすでに芥川自身の言うように「わたしのクリスト」であるならば、両者の比較検討はそれほど本質的な意味は持たないように見える。

『西方の人』の素材は、ほとんど『新約聖書』の福音書に集中しており、福音書以外の部分、すなわち「使徒行伝」、各種書簡、「ヨハネ黙示録」などからの引用は皆無である。その理由についての関口安義氏の、「芥川がクリスト教論を試みているのではなく、人間イエス論を指向していることを示すものである。」という解釈は、聖書から取材しながらも「聖書離れ」という笹淵友一氏の指摘を裏付けており、芥川が救い主としてのクリストを描こうとしたのではなく、人間イエスに自分の姿を託したものだということ語るもの

でもある。

さらに、宮坂寛氏は『西方の人』の小題目の内容の出典を『新約聖書』から引いて整理しているが、氏は『西方の人』の引用聖句は福音書のすべてからではなく、主に「マタイ伝」からの引用であると指摘する。その理由を氏は、

疲労困憊の中で、絶筆「西方の人」は書かれるのであるが、その野心はしばしば萎えさせられた。それが、マタイ伝という枠組の借用、後半の筆の鈍さとして現れた。そして、彼は充足感の欠落のために、もう一度筆を執り絶筆「続西方の人」を立て上げなければならなかった。

と、指摘している。これはいくらかは頷ける点もあるが、疑問の余地もある。なぜなら、〈枕頭の聖書〉の傍線の九割近くが「マタイ伝」に集中しているのを氏はすでに確認しており、その事実から得られる結論は、平素芥川は四福音書の中でも最も形式が整っている「マタイ伝」に、他の福音書よりも愛着を持っていたことが分かるからである。それゆえ、彼が時間の制約によつて「マタイ伝」のみを借用して「西方の人」を書き上げたとは断言できない。芥川が特に「マタイ伝」に傾倒していたことは、彼がしばしば引く〈山上の垂訓〉への執着にも垣間見られるが、もう一つの理由は「マタイ伝」の「野蛮な美しさ」（続²伝記作家）のためでもあらう。

「彼は遂に彼固有の傑作をもたなかつた。——彼のいかなる傑作の中にも前世紀の傑作の影が落ちてゐる」とは堀辰雄の評であるが、芥川作品の多くが古今東西の作品から取材しているのは周知の事実である。のみならず、彼は彼の作品に、原作から換骨奪胎させ、現

代的意味を加える方法を『羅生門』をはじめとする初期作品以来、一貫して取り続けてきた。切支丹物においては『奉教人の死』を『聖人伝』から、『きりしとほろ上人伝』を『黄金伝説』から、『糸女覚え書』を『霜女覚え書』から各々取材して、原典とは異なる新しい解釈を加えている。

同じく、『正統』『西方の人』も、素材は『新約聖書』から取りつつ、言わば、キリストに芥川自身を託した、へわたしのキリストを描いて見せた。それゆえ、『正統』『西方の人』について指摘するところはほとんどの論者が一致している。吉田精一氏は、

彼の目にうつったキリストは古代のジヤナリストであり、詩人であり、『比喩』とよばれる短篇小説の作者だつたと共に『新約聖書』とよばれる小説的伝説の主人公だつた（『続西方の人』）のである。彼は新約聖書を「小説的伝記」として、即ち芸術として愛すると共に、キリストの内に彼の自画像を見出そうとしたのである。⁽⁵⁾

と、言い、また笹淵友一氏は、

彼がキリストをジヤナリスト、詩人と呼び、キリスト教を「クリスト自身も実行することの出来なかつた、逆説の多い詩的宗教」と定義したのも皆彼自身の肖像をキリストに見出さうとする内的欲求の結果である。⁽⁶⁾

と、やはり芥川が「自身の肖像」を描こうとしたという点では全く一致している。さらに、佐藤泰正氏も、

まさに「野生の呼び声」ならぬ、これは「西方の呼び声」を聴きえたものまぬかれざる宿命を、そのひそかなおののき

と榮光を、わがキリストに託して語らんとしたものにほかなるまい。⁽⁷⁾
と、いわゆる芥川自身のアナロジーとしての一作品と見ている。

二

『正統』『西方の人』で芥川が描こうとしたのがキリストに託した芥川自身のアナロジーであつたとすれば、一体「キリスト」の精神的血統とは何かが問われることとなる。同時にそれはそのまま芥川自身の自己解釈ともなる。芥川は「キリスト」をマリアが或る夜聖霊に感じて生んだ「聖霊の子」であり、また「マリアの子」であるのとらえる。これは「主は聖霊によりてやどり、処女マリアより生まれ……」という「使徒信条」の一節とも符合する。しかし、『西方の人』と「使徒信条」、あるいは聖書本来との根本的な差は、芥川の聖霊とマリアについてのとらえ方の違いにある。芥川はマリアを、
我々はあらゆる女人の中に多少のマリアを感じるであらう。

同時に又あらゆる男子の中にも——いや、我々は炬に燃える火や島の野菜や素焼きの瓶や巖壘に出来た腰かけの中にも多少のマリアを感じるであらう。マリアは「永遠に女性なるもの」ではない。唯「永遠に守らんとするもの」である。（『マリア』）と見る。「あらゆる女人の中に」、また「あらゆる男子の中にも」とは、我々人間すべてに日常性そのものを指すものである。それは地上的な平凡さをも意味する。それゆえ、「永遠に守らんとするもの」が地上の日常的現実そのものの肯定を意味することは明らかである。それはこの日常性の変革、また現実を超えて飛翔せんとする一

切の浪漫的指向とは全く対極的なものである。

「永遠に女性なるもの」とは、ゲーテの「ファウスト」第二部第五幕の最終場面の「永遠に女性なるもの／我等を引き去て往かしむ」の一節からの引用であるが、ゲーテはこの作中にグレートヒエンという女性を登場させ、彼女に罪をまがなう純真で気高く強い魂を与え、永遠不変の女性の美しさを、またやさしさを讃えた。

ゲーテのこの作品には長年西欧の思想を支配してきたカトリックの聖母マリアのイメージが背景にあり、芥川の言うマリアもまたこれらをもまえたものであるが、しかしこのような聖母マリアを思わせる「永遠に女性なるもの」のイメージを芥川は地上に引き降ろし、「永遠に守らんとする」、日常性そのものの表現と見ようとする。

クリストの母、マリアの一生もやはり「涙の谷」の中に通つてゐた。が、マリアは忍耐を重ねてこの一生を歩いて行つた。世間智と愚と美德とは彼女の一生の中に一つに住んでゐる。

(2 マリア)

また次のように言う。

平和に至る道は何びともクリストよりもマリアに学ばなければならぬ。マリアは唯この現世を忍耐して歩いて行つた女人である。(続II或町のクリスト)

さらにまた「ニーチエの叛逆はクリストに対するよりもマリアに対する叛逆だつた」とも言う。こうしてニーチエの叛逆とはキリストならぬ、まさにこの地上の凡俗なもの、日常的なもの、「世間智と愚と美德」を備えた凡俗なる生活そのものへの嫌悪とも言える。

次に聖霊を芥川は、

『西方の人』考察(上)

我々は風や旗の中にも多少の聖霊を感じるであらう。聖霊は必ずしも「聖なるもの」ではない。唯「永遠に超えんとするもの」である。ゲーテはいつも聖霊に Daemon の名を与へてゐた。(中略) 聖霊は悪魔や天使ではない。勿論、神とも異なるものである。我々は時々善悪の彼岸に聖霊の歩いてゐるのを見るであらう。善悪の彼岸に、——しかしロンプロゾオは幸か不幸か精神病者の脳髓の上に聖霊の歩いてゐるのを発見してゐた。

(3 聖霊)

と見る。「多少の聖霊」を我々は「風や旗の中にも」感じるであらうと言う。この「風」とは、たとえば「使徒行伝」第二章一節から四節までに、

五旬節の日となり、彼らみな一処に集ひ居りしに、烈しき風の吹ききたるとき響、にはかに天より起りて、その坐する所の家に満ち、また火の如きもの舌のやうに現れ、分れて各人の上にとどまる。彼らみな聖霊にて満され、御霊の宣べしむるまに異邦の言にて語りはじむ。(傍線筆者)

ともあるように、聖書の中では聖霊そのものを象徴する。これは「詩篇」第百四篇四節や「エゼキル書」第四十三章二節など、聖書の多くの箇所に見るところである。しかし、この作品での「風」とは、浪漫的精神そのものを意味すると見てよい。

芥川は聖霊を「聖なるもの」ではなく、唯「永遠に超えんとするもの」であるとする。彼は現実を越えんとする精神の飛翔を聖霊と呼ぶ。勿論キリスト教では聖霊を、

ヨハネ福音書においては、聖霊は地上のキリストに代わつて弟

子たちのもとに来て、彼らをキリストの真理に導き、それを啓示する「真理の御霊」であるが、この聖霊と神、キリストとの関係は後の三位一体の教説の基礎となった。

ともあるように、人を信仰に導き、信仰の奥義を悟らせ、その魂の救済をはかる聖なる力の働きとされる。

しかし、ゲートルは聖霊を Daemon と名付けたと芥川は言う。この Daemon をプラトンは神と人間の間にある中間的存在と見ており、ユダヤ人やキリスト教徒は、神にはむかう悪しき性質の霊的存在と考える。芥川はこの Daemon を遺稿『闇中間答』（昭二、九）では次のように描いている。

或声 では俺を誰だと思ふ？

僕 僕の平和を奪つたものだ。僕のエピキュリアニズムを

破つたものだ。僕の、——いや、僕ばかりではない。

昔支那の聖人の教へた中庸の精神を失はせるものだ。

お前の犠牲になつたものは至る所に横はつてゐる。文学史の上にも、新聞記事の上にも。

或声 それをお前は何と呼んでゐる？

僕 僕は——僕は何と呼ぶかは知らない。しかし他人の言

葉を借りれば、お前は僕等を越えた力だ。僕等を支配する Daemon だ。

聖霊は Daemon であり、Daemon は「僕等を越えた力」であり、「善悪の彼岸」にあるものと見る。こうして芥川は〈聖霊〉を「永遠に超えんとするもの」と言う。ここにはニーチェのいう〈超人〉思想の影響も見られるが、芥川はこれを〈超人〉ならぬ「天才」

という言葉で表現しようとする。『西方の人』では、この「天才」という言葉が繰り返されている。

クリストは僅かに十二歳の時に彼の天才を示してゐる。(13 最初の弟子たち)

* 彼の天才は飛躍をつづけ、彼の生活は一時代の社会的約束を踏みにじつた。(14 聖霊の子供)

* 彼は彼の天才の為に人生さへ笑つて投げ棄ててしまつた。(18 クリスト教)

* 彼はそこでも天才だつたと共にやはり畢に「人の子」だつた。(27 イエルサレムへ)

* が、天才を信じない犬たちは——いや、天才を発見することは手易いと信じてゐる犬たちはユダヤの王の名のもとに真のユダヤの王を嘲つてゐる。(31 クリストよりもバラバを)

* 勿論クリストの一生はあらゆる天才の一生のやうに情熱に燃えた一生である。(36 クリストの一生)

〈聖霊の子〉であるというの、まさしく「天才」そのものを指す。さて、この芥川独自のマリア論、聖霊論とは、『西方の人』を貫く基軸であり、磯田光一氏は、

ここにいう「聖霊」と「マリア」とが、それぞれ人間の「精

「神的指向」と「実生活」とを象徴していることは疑う余地がない。¹⁹⁾

と解釈している。また、梶木剛氏は、

「やはり『涙の谷』に通つてゐた」「唯の女人」に過ぎない一生を持つマリアとは、あらゆる〈大衆的なるもの〉の象徴であることを意味する。「永遠に守らんとするもの」とは〈大衆的なるもの〉とシノニムである。それなら、そういうマリアが「聖霊に感じて」生み落としたクリストとは何物か？ 彼は「あらゆるクリストたち」の一人であり、多くの「聖霊の子供たち」の一人として「永遠に超えんとするもの」の典型であるに外ならない。つまり、「聖霊」(≡知識)に憑かれて〈大衆的なるもの〉を「永遠に超えんとする」〈知識人〉の象徴であるに外ならない。²⁰⁾

と述べている。この両氏の解釈は、芥川の基本の発想をよく言い当てたものと言える。

三

さて、芥川が「わたしのクリスト」として描こうとする、その独自のイメージとは何であろうか。

芥川の眼に映つたクリストの姿は、まず第一にジャーナリストであった。天才的ジャーナリスト、それが芥川の言う「わたしのクリスト」の一面である。このジャーナリストとは「時事、日常に即して自分の思想、信念を大衆に訴えひろめる、大衆を動かす者。その様な性質の人間、そんな才能の所有者の意」²¹⁾であるという解釈もあ

『西方の人』考察(上)

るが、芥川の言わんとするところはより深く根源的なものであろう。

「クリストは洗礼を受けると、四十日の断食の後、忽ち古代のジャアナリスト」(続5生活者)になり、「海のやうに高まつた彼の天才的ジャアナリズム」(14聖霊の子供)で、「貧しい人たちが奴隷を慰めることになつた」(続22貧しい人たちに)。この「見る見る鋭い舌に富んだ古代のジャアナリストになつて行つた」(13最初の弟子たち)キリストは、「ロオマの詩人たちにも遜らない第一流のジャアナリストだつた」(続21文化的なクリスト)ゆえに、「一時代の社会的約束を踏みにじつた」(14聖霊の子供)〈天才〉となる。彼のこのような「天才的ジャアナリズムは勿論敵を招いたであらう」(14聖霊の子供)とも言う。キリストをジャーナリストと見、ジャーナリズム至上主義者とまで呼ぶ芥川のキリスト観は、言うまでもなくキリスト教本来のそれとは概念を異にする。キリストを語るに

それ神はその独子を賜ふほどに世を愛し給へり、すべて彼を信ずる者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり。(ヨハネ

伝)第三章一六節)

とは、聖書の端的に言い表すところであるが、芥川の語るキリストは天才ジャーナリストであり、詩人として、ワイルドの『獄中記』の言葉を借りれば「ロマン主義者の第一人」ということである。彼はこのキリストに自身の先達としての熱い視線を注いでいる。

キリストの最も愛したのは目ざましい彼のジャアナリズムである。若し他のものを愛したとすれば、彼は大きい無花果のかけに年とつた予言者になつてゐたであらう。(続6ジャアナリズム至上主義者)

「しかし運命は幸か不幸か彼にかう云ふ安らかな晩年を与へてくれなかつた。しかし、この悲劇のゆえにこそ彼は「永久に若々しい顔をしてゐるのである」と言う。

また「続西方の人」の最終章の「22貧しい人たちに」では、

彼は実にイスラエルの民の生んだ、古今に珍らしいジャアナリストだつた。同時に又我々人間の生んだ、古今に珍らしい天才だつた。「予言者」は彼以後には流行してゐない。しかし彼の一生はいつも我々を動かすであらう。彼は十字架にかかる為に、——ジャアナリズム至上主義を押し立てる為にあらゆるものを犠牲にした。

とも言う。芥川の共感と熱い羨望がどこにあるかはすでに明らかである。

またさらに、

クリストは彼の詩の中ほどの位情熱を感じてゐたであらう。「山上の教へ」は二十何歳かの彼の感激に満ちた産物である。

(14聖霊の子供)

と云い、そのジャアナリズムの本質はクリストの詩的情熱の昂まりにあると見る。

鈴木秀子氏は「芥川龍之介は、クリスト教観をルナンから、その表現をワイルドから受け聖書の一行々々を忠実にたどりながら、『わたしのクリスト』を書いた」と指摘しているが、ワイルドはその『獄中記』で、「人生における浪漫運動の先駆者としてのクリスト」を語り、クリストを浪漫主義の第一人者と見ている。芥川はこのワイルドをふまえて、「彼の道は唯詩的に——あすの日を思ひ

煩はずに生活しろと云ふことに存してゐる」(18クリスト教)と言ひ、「花嫁、葡萄園、驢馬、工人——彼の教へは目のあたりにあるものを一度も利用せずにすましたことはない。『善いサマリヤ人』や『放蕩息子の帰宅』はかう云ふ彼の詩の傑作である」(19ジャアナリスト)と言ひ、(山上の垂訓) 以外にもクリストの様々な比喩の説教を詩であるとみなし、クリストの本質はそのものであると見る。

しかもクリストは(詩的正義の王国)建設のために戦ひ続けた(兵士)の一人でもあると見る。

クリストはこの神の為に——詩的正義の為に戦ひつづけた。

(20エホバ)

*

しかしクリストは彼自身も「善き者」でないことを知りながら、詩的正義の為に戦ひつづけた。(続9クリストの確信)

*

後代はこの盗人に彼等の同情を示してゐる。が、もう一人の盗人には、——クリストを罵つた盗人には軽蔑を示してゐるのに過ぎない。それは正にクリストの教へた詩的正義の勝利を示すものであらう。(続18二人の盗人たち)

この「詩的正義」という言葉は明らかにワイルドの『獄中記』の「クリストの正義はすべて詩的正義だ。そして、正義とはまさしく詩的正義であるべきだ。」という一節をふまえたものであるが、芥川はまたクリスト教を「逆説の多い詩的宗教」とする。

クリスト教はクリスト自身も実行することの出来なかつた、逆説の多い詩的宗教である。(18クリスト教)

クリストの教へた逆説の一つは「我まことに汝等に告げん。若し改まりて幼な児の如くならずば天国に入ることを得じ」である。(26幼な児の如く)

クリストは事実上逆説的にも正にこの瞬間には彼等に劣つてゐると同時に彼等に百倍するほどまさつてゐた。(統11或町のクリスト)

このように、クリスト教を「逆説の多い詩的宗教」と見るならば、クリストは「逆説の詩人」とも言える。たとへば、「されど汝らの中に於ては然らず、返つて大ならんと思ふ者は、汝らの役者となり、頭たらんと思ふ者は、凡ての者の僕となるべし。」「マルコ伝」第一〇章四三、四節)などクリストの言葉は論理を越えた逆説そのものであり、更には、「富める者の神の国に入るよりは、駱駝の針の穴をとほるは返つて易い」(「ルカ伝」第一八章二五節)という比喩などもクリスト一流の逆説である。

芥川はこれらのクリストの言葉に逆説をみながらも、それを「詩」という概念で把握しようとし、その「詩」の作者クリストを「詩人」そのものと呼ぶ。

芥川が正統『西方の人』で描こうとしたクリストのイメージは、ここでほぼ浮かび上がる。クリストの目指すところはジャーナリズムの昂揚であり、詩的正義である。芥川がそこに描こうとしたものは「救い主」ならぬ、芸術家としての受難の先達の悲劇であり、芥川はその熱い共感を隠そうとはしていない。

『西方の人』考察(上)

四

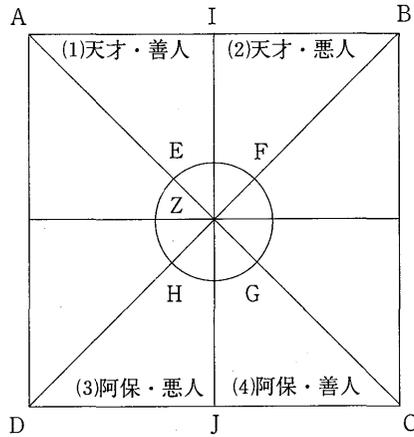
正統『西方の人』には聖書に書かれた人物としてクリスト以外にも三十人以上の人物が登場するが、芥川はこれらの人物をそれぞれユニークな視点から考察している。彼の批評に照らされた人物たちは、福音書の世界を離れ、彼一流のユーモアとアイロニーの下に考察される。ここではクリストをめぐる人物の考察を通じて、周辺の人物によってより明確に浮かび上がるクリスト像を考えてみたい。

数多くの人間をより簡単な形態に分類しようとする試みは古くよりあった。その代表的な研究が紀元前五世紀頃のヒポクラテスによつて分類された、多血質、憂鬱質、胆汁質、粘液質の四分した人間の氣質分類である。以後も古今東西を問わず、このような企ては続けられた。

さて、ここでより単純化して、①知的能力と、②指向点、という二つの軸を定めて、それによつて人間を分類すれば、(1)天才・善人、(2)天才・悪人、(3)阿呆・悪人、(4)阿呆・善人の四つの種類の人間が表れる。それを図式化すれば次のようになる。

芥川は『侏儒の言葉』で「遣伝、境遇、偶然、——我々の運命を司るものは畢竟この三者である。」「(運命)」と記しているが、複雑多岐な人生をこのような三つの概念ですべて説明しうるかという疑念がないわけでもないが、「偶然」ということが加えられている以上は、変化無常な人生もある程度は説明できないことでもない。しかし、今ここで試みる図式は二つの固定概念をもつて人生のすべてを解剖しようとするものである。それは不可能かもしれない。しかし、単純化された図式を通じて、複雑な人間の生の姿をより明瞭に

見ることはできる。



ABCDの四角は有り得る世間すべてを表す。我々人間は、この四角の中のどこかで一点として存在する。しかし、実際に世間を生きていく人間の大部分は円の内のある地点に存在する。円の内というのは普通我々が生活する生活の場を指す。円の内外を問わず、人間は四つのタイプがあり、この四つのタイプの人間が合致する地点がZであるが、実際このような中間的な、無指向的な人間が存在するとは言い難い。そうして、指向線としては善人の線であるA—

Cのラインがあり、悪人の線であるB—Dのラインがある。また、天才の線であるZ—Iのラインがあり、阿呆の線であるZ—Jのラインがある。その上、実際人間は円のように三百六十度の指向点を持つはずであるが、それを単純化すれば、ZからABCD、またはABCDからZへと指向点を持つていと考えられる。

さて、『西方の人』の「3聖霊」には、

のみならずいつもこの聖霊に捉はれないやうに警戒してゐた。が、聖霊の子供たちは——あらゆるクリストたちは聖霊の為にいつか捉はれる危険を持つてゐる。

と、「クリスト」を複数の「あらゆるクリストたち」と表現している。この表現は後に「アメリカのクリスト」(ホキットマン)、「彼の後に生まれたクリストの一人」(ゲエテ)「彼の前に生まれたクリスト」(バプテズマのヨハネ)、「彼の前に生まれたクリストたち」(モオゼ・エリヤ)、「世間智に富んだクリスト」(アリマタヤのヨセフ)などと具体化されるが、芥川は「クリスト」という言葉を単にイエス・キリストを指すものとせず、「聖霊の子供」、すなわち、「天才」でありながら「詩的正義」を指向する人々すべてを指し、その頂点に立っている者をイエス・「クリスト」と見る。図で言えば、(1)に属するもので、E地点からA地点を目指して生き、その線上にある人々を芥川は「あらゆるクリストたち」と呼び、A地点に到達した唯一の者がイエス・「クリスト」であると見る。この頂点にあるものは言うまでもなく、「ロマン主義者」であり、「詩的正義」の〈兵士〉である。

それゆえ芥川は、ワイルドは「彼にロマン主義者の第一人を發見

した」(18キリスト教)と言ひ、「バプテスマのヨハネはロマン主義を理解出来ないキリスト」(11ヨハネ)とし、キリストに及ばない者と考へている。また、「キリストはこの神の為に——詩的正義の為に戦ひつづけ」(20エホバ)、「勝利を示」(統18二人の盗人たち)した者であると思へている。

正統『西方の人』が芥川の「自画像」や「自身の肖像」をキリストに託して表現しようとしたものならば、芥川は自己自身の座標点をどこに定めたのであろうか。それは言うまでもなく、A—E線上のどこかに自分を置いたに違ひない。

さて、宮坂寛氏は「愚人」を定義して、
その芥川にとつて、理性の場、日常の場における明暗を克服する方法は二つあつた。一つはしたたかな自我人、超人への道であり、一つは場の認識を受け止めることの不能な者の道である。芥川は、このような人間像に強い憧憬を抱いている。後者が愚人憧憬と言つてよく、その美談否定、英雄否定の逆の力学を有するものである。¹⁶

と言ひ、切支丹物に限つてその代表的人物として、れぶろぼす(『きりしとほろ上人伝』)、吉助(『じゆりあの・吉助』)、金花(『南京の基督』)などを挙げている。この人物はすべて(4)に属する者として、G地点からC地点を指向して生きていく。その線上にある人を芥川は(阿呆)と考へ、その頂点のCに到達した唯一の者がまたイエス・キリストであると思へる。そのC点に立つているイエス・キリスト」を芥川は「超阿呆」と命名した。

キリストは彼のジャアナリズムのいつか大勢の読者の為に持

て囃されることを確信してゐた。(中略)キリストも亦あらゆるキリストたちのやうにいつも未来を夢みてゐる超阿呆の一人だつた。若し超人と云ふ言葉に対して超阿呆と云ふ言葉造るとすれば、……(統9キリストの確信)

芥川は「二十歳」から執筆時までを五十一章に分けて書いた、自己一生の回顧録ともいえる遺稿『或阿呆の一生』で、自らを(阿呆)と名付けている。とすれば、芥川自らがG—C線上のどこかに行んでいゝ自身を自覚したに違ひない。

「超人」と「超阿呆」、「天才」と「愚人」は裏を返せば同一概念であり、その極点においては同一のものになるのであるうか。ここで注目したいのは「キリスト」は「天才」であれ「阿呆」であれ、「善人」のA—C線上に、Zを中心とする遠心力の果てのAとCに立つてゐることであり、それはまた、芥川が自らを「キリスト」に託して表現しようとする芥川自身の線であり、指向点でもあると言ふことである。

(2)に属する人間は正統『西方の人』に最も多く見られる。その代表的な人物はカヤバ、サロメ、バラバ、ピラト、ヘロデなどであるが、彼らは世間と人間を把握するには天才的素質を持つてゐるものの、その天才性をもつて真実を歪曲したり、破壊したりする。彼らの所為の頂点はもちろんキリストを十字架に付けたことである。彼らは図のF点からB点を指向する人々で、その中でも幼い「キリスト」を殺そうと企てたヘロデがその頂点に立つ者と言へる。

ヘロデは或大きい機械だつた。かう云ふ機械は暴力により、多少の手数を省く為にいつも我々には必要である。彼はキリス

トを恐れる為にベツレヘムの幼な児を皆殺しにした。勿論クリスト以外のクリストも彼等の中にはまじつてゐたであらう。

(中略) 我々はヘロデを憎むことは勿論、軽蔑することも出来るものではない。いや、寧ろ彼の為に憐みを感じるばかりである。ヘロデはいつも玉座の上に憂鬱な顔をまともにしたまま、橄欖や無花果の中にあるベツレヘムの国を見おろしてゐる。一行の詩さへ残したこともなしに。……(8ヘロデ)

この類型の人物の特徴は権力の所持者であるが、それがモーセやエリヤのように正義に立つ権力者ではなく、悪意の権力者であるところに特徴がある。もう一つは「一行の詩さへ残したこともなし」である。彼らは、「クリスト」のいわゆる「詩の王国」の対極に立っている。

カヤバはさらに袍を着下し、冷かにクリストを眺めてゐたであらう。現世はそこにピラトと共に意気地のない聖霊の子供を嘲つてゐる。燃えさかる松明の光りの中に。……(統17カヤバ)

ここにも権力者の属性がよく表れている。形だけは闇の世を照らすかのように燃えさかる松明のものものしい光の中で、この世の生活力の弱者たる聖霊の子供、すなわち真理そのものを嘲つてゐるのである。

この(2)に属する者は天才的な利口さのため自滅するか、もしくは、「すべて剣をとる者は剣にて滅ぶるなり」(「マタイ伝」第二章五二節)の言葉のように、強力な新権力によつて悲惨な最後を迎へることになる。実はそれが人類の権力の闘争史でもあった。

この(2)の人々よりさらに「クリスト」を悩ませた一団は(3)

に属するものである。(3)の人々はいつても(2)の人々の下手人として、権力の庇護を受けながら自分の利益を図る者である。これに属する人々はH点からDの点を指向しており、その頂点にあるものがサドカイの徒やパリサイの徒である。

サドカイの徒やパリサイの徒はクリストよりも事実上不滅である。この事実を指摘したのは「進化論」の著者ダアウインだつた。彼等は今後とも地衣類のやうにいつまでも地上に生存するであらう。「適者生存」は彼等には正に当嵌まる言葉である。彼等ほど地上の適者はない。彼等は何の感激もなしに油断のない処世術を講じてゐる。マリヤは恐らくクリストの彼等の一人でなかつたことを悲しんだであらう。(統16サドカイの徒やパリサイの徒)

ここでも(2)の人々のように「彼は何の感激もなし」と言う。それはやはり「詩的正義」のために戦つた「クリスト」とはまったく相容れないものである。事実「クリスト」が最も嫌悪を抱いたのはこの人々であつたことは確かである。

が、彼等は、——サドカイの徒やパリサイの徒は今日でも私かにこの盗人に賛成してゐる。事実上天国にはひることは彼等には無花果や真桑瓜の汁を啜るほど重大ではない。(統18二人の盗人たち)

昔的俗物は、今日も依然として、心ひそかに、「クリスト」の説いた詩的正義よりも衣食を重大視していると、彼らの厚顔無恥の処世術を鋭く刺す。しかしその背後の芥川の絶望も深いのである。このようにしてみれば、A—C線指向的人間と、B—D線指向的

人間との二つのグループに分けることができる。A—C線に立つものが「あらゆるクリストたち」であるならば、B—D線に立つものはこの世間的な権力者であり、サドカイの徒やバリサイの徒である。しかもこの二線はクロスしつつ、しかもついに融合することはできない。そればかりでなく、クリストは(2)と(3)の人々によって十字架に付けられ、世を去った。すなわち、A—Cの頂点に立っているキリストが彼らによって生命を絶たれたのである。その時、A—C線上に立っている、「誰かの保護を受けなければ、人生に堪へない」(26幼い児の如く)無数の「あらゆるクリストたち」は、「クリスト」がモーセやエリヤに投げ付けた同じ問い、「我等は如何に生くべき乎」(25天に近い山の上の間答)を自らに問わねばならない。しかもそれらには芥川自身の問題であり、その先達と言える「クリスト」が世俗の力によって死に追いやられねばならなかった時、「群小作家の一人」(「闇中間答」)である自身が歩まなければならぬ道の、その運命の必然の何たるかは、心底まで響いたに違いない。

さて、「世間智と愚と美德」とを一身にままとっているマリアはどこに位置付けられようか。マリアは「唯の女人」として円の内を出てはいない。「世間智」とは(3)の人々の持つものであり、「愚」とは(2)の人々が持つものであり、「美德」は(1)と(4)の人々が持つものであるとするならば、マリアの位置はZに置くべきであろうか。とすれば、「永遠に超えんとするもの」がA点、C点指向の遠心力の作用であるに対して、「永遠に守らんとするもの」はZ点指向の求心力の作用であろう。この相互に拮抗する力学の中

心にあるものが「クリスト」であり、それはまた、ほかならぬ芥川自身でもある。

さて、「いたく憂て死ぬばかり」な彼の心もちを理解せずに橄欖の下に眠つてある」(28イエルサレム)弟子たちの位置とはどこであろうか。それはZの丸点が少し大きくなった円を想像すればよいであろう。なぜなら、キリストの弟子たちの多くは、「唯の女人」のマリアとほとんど変わりない平凡な漁師たちであったからである。この弟子たちもまた「永遠に守らんとするもの」のカテゴリに入る人物である。

注

- (1) 鈴木秀子 「続西方の人」(母なるもの)への傾斜(『国文学』 昭47・12)
- (2) 笹淵友一 「西方の人」(菊地弘他編 『芥川龍之介事典』 明治書院 昭60)
- (3) 関口安義 「西方の人」『続西方の人』考(『都留文科大学研究紀要』 昭51・9)
- (4) 宮坂 覚 「西方の人」—その行程(『絶筆』(聖書)を軌軸として—(菊地弘他編 『芥川龍之介研究』 明治書院 昭56)
- (5) 吉田精一 『芥川龍之介』(新潮文庫 昭33)
- (6) 笹淵友一 『芥川龍之介のキリスト教思想』(『解釈と鑑賞』 昭33・8)
- (7) 佐藤泰正 『テキスト評釈』 『西方の人』 『続西方の人』

- (8) 山谷省吾 『国文学』 昭33・7
『新約聖書小辞典』(新教出版社 平元)
- (9) 磯田光一 「芥川龍之介と昭和文学―『西方の人』を中心に―」(『国文学』 昭43・12)
- (10) 梶木 剛 「芥川龍之介のなかの知識人と大衆―『西方の人』をめぐって―」(『国文学』 昭45・11)
- (11) 吉田高次郎・中野恵海 『芥川龍之介 西方の人 全・注解』(清水弘文堂 昭57)
- (12) 鈴木秀子 「芥川龍之介とキリスト教―『西方の人』を中心として―」(『聖心女子大学論集』 昭42・12)
- (13) ワイルド著・福田恆存訳 『獄中記』(新潮文庫 昭29)
- (14) 宮坂 覚 「愚人」(菊地弘他編 『芥川龍之介事典』 明治書院 昭60)